
MMOゲームでの一コマ

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MMOゲームでの一コマ

【Zノード】

Z0770F

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

暇なので、久しぶりにあるMMOゲームにログインした男＝マー坊の数奇な運命を短く語る。この話はウルティマオンラインというゲームをモチーフにして作られています。

「ふあー暇だ」

背筋を後ろに逸らし、大きな伸びをする。

男はだるそうな顔で、リクライニングソファーに腰掛けるというよりは寝そべっていた。

彼はせっかくの休みだといつのに、特に行くあてもなく、雨も降つてきそうなので、家に引きこもっていた。

あまりの手持ちふたさに、彼の手がパソコンの電源に伸びる。小さな機械音とともに、ソフトが起動し、液晶の画面に青い背景が映し出され、一瞬、暗転したのち、設定された内容が映し出される。

気が短い男は先走って、まだカーソルもでないうちから、砂時計のマークをマウスを操って画面狭しとくるくる回し始めた。

パソコンを立ち上げたものの、特に見たいホームページが浮ばない男は、なんとなく、ほんの気まぐれで、あるMMOゲームのアイコンを久しぶりにダブルクリックした。

ゲームがたちあがり、パスワードを素早く打ち込むと、長方形の画面にゲームのイメージが映し出されたオープニング画面が現れる。そして、OKボタンを押すと、男はしばし、仮想空間で戯れる事にした。

MMOゲームとは何か？

一言で言つのも難しいが、敢て書き連ねるなら、仮想空間に自分のキャラを作つて、その中で自由に動かせるゲーム。の中には同じようにしてマイキャラを動かす人々が、数千、数万人いて、同じ

空間を共有していた。

男が始めたのもそんなMMOゲームの一つである。
だけど、男はこのゲームをもう数年続けていて、今更これを始め
ても大した新鮮味を感じる事は無かつた。

取りあえず、この仮想空間にある大陸のある街に、自分のキャラ
クターを呪文をつかって移動させた。

ここは、数ある街の中でも、特にプレイヤーが集中する、いわば、
大都市である。

街のあちこちに大通りを往来する人々の姿が見て取れる。

男はマイキャラを動かす。

使うキャラは羽根突き帽子に白いロープを纏い、サンダルを履いた男キャラ。

特に目立つキャラでもない。

周りにいる特殊な格好（鹿、熊の被り物、パンツ一丁、骸骨仮面、
裸にエプロン）をしたキャラと比べれば、地味な方である。

男はあるキャラを視界に捉えると、自分のキャラを歩かせ、そちらへ移動させる。

相手もさしづいたのが、こちらにキャラを向かせて、何かを期待している。

「おひさしふり～

「やあ

明るい青のローブを纏った松明を手にする女キャラ。

男はとりあえず、特殊なコマンドを用いて自キャラをお辞儀させ
る。

相手もお辞儀してくる。この辺は実社会と同じだらうが。

「最近どうしてたん？ みなかつたね」

「くんから、男のキャラクターと呼ぶ事にある。相手は
マーキちゃん。」

「マーキちゃんは返答に困る。」

『ゲームに飽きた』と二つ本音を零すと、心象が悪い気がした。

「マーキちゃんはこう見えて、まだこのゲームをやり始めて、それほど経っていない。」

まだ彼女はこのゲームが楽しくて仕方が無い。なので、口が裂けても自分が飽きてきた事を

彼女に伝えるわけには行かない。それは一種のマナーだ。

「ああ、仕事が忙しくてね~」

マーキちゃんを操る男は咄嗟に嘘をマーキちゃんに喋らせた。

彼はニードだ。仕事なんかしていない。

「うなんだ、大変だね~」

マーキちゃんは無難にうなづいた。街の噴水をくぐる回り始めた。

まだ回っている、いつ止まるんだろと男は思つたが、取りあえず、その様子を鼻くそほじりながら眺めていた。

マーキちゃんは回るのに飽きたのか、こりこり近付いてきて、マーキちゃんに何かを言つ気だ。

鼻をほじる手を止めると、男はすぐパソコンのキーボードに手を置く。

中々油断というものができないのがMMOゲームである。少しでも会話が遅れると、実社会でも同じだが、コイツ無口な奴だな？とか無視しやがって！といつもいつな悪印象を相手に植え付けかねないのだ。

「マーちゃん狩り行く？」

「ああ、いいよ」

男は内心、めんどくせーっと思いながらも、初心者マーちゃんの手前、不承不承ながらも、そのマーちゃんの提案を肯定した。

ある狩場にて。

この仮想空間での狩場と zwar、洞窟やフィールドだが、特に洞窟内にモンスターは集中していた。

「×洞窟に入ろう

「うー」

男は片手で面倒くさそうに言葉を打つと、マーちゃんはマーちゃんの後を追つて、その中へ入つていく事になる。

入り口に入ると、剣と剣がぶつかる激しい炸裂音と独特的の洞窟のテーマ曲が流れてくる。

入つていきなり、誰とも知れないキャラがモンスターと戦つてい

た。

重苦しい鉄の防具を上下に付け、何故かメガネを掛けた男キャラは長槍を手に持ち、モンスターに接近しては、離れのヒット＆アウエイな戦い方で、じりじりとそのモンスターの息の根をためにかかっていた。

(マーちゃんの操り主＝マー坊とします。)

マー坊はその男キャラにマウスを置き左クリックしたまま、右にずらす事で彼のHPバーを引きずり出し、そして、彼と戦うモンスターのHPバーをも引き出した。

モンスターのHPゲージはまだ半分しか減っていない。

しかし、彼のキャラのHPはモンスターの一撃を浴びるごとに8割無くなり、そのたびに後ろに下がって、包帯を使って回復したのち、またモンスターの懷へ突っ込んでいく。

マー坊は心の中で思う。

防具しょぼいんじや？ 貧乏なんだろうな？ スキルの値も低そうと多少蔑みに満ちた眼を向けて、パソコンの前でぼくそえんでいた。

マー坊がさーって中へ踏み入つて、もっと強そうなモンスターからお金巻き上げようかなーっと歩き始めたその時！

ミーチャンが動いた。

なんと、その男に加勢したのである。

「ちょ、ミーチャン、他で狩りしようぜ、そのモンスターは彼のものだよ」

そうだ、あのモンスターを自力で一人で倒せば、その死体に入っている戦利品は全て彼のもの。MMOゲームでは、そういうことを踏まえて、他人の戦いに何の言葉もなしに割りはいることは法度

とされていた。

しかし、ミーチャンはそんな事は知らない。いや分からないのである。

彼女は苦戦している男キャラを助けたい一心で、助太刀にはいつただけだ。

正義と友情という言葉が彼女のピンクのマントに映りこむような幻覚を覚える。

「任せて！一緒に倒そう」

ミーチャンはモンスターにキャラを近づけた間、自慢の大剣をモンスターに振るつていたが、近付きすぎたせいもあるが、男キャラに向つっていたモンスターの矛先が突然、ミーチャンに移ってきた。その瞬間、一撃を浴びただけで、外国人の女の呻きみたいな声と共に、ミーチャンがその場で息絶える。

「ミーチャン、どうした？」

「てへ、死んじやつた」

見ると、死体の傍から幽霊の姿で現れるミーチャン。

このゲームはその場で死ぬと、幽霊となつて現れる仕様だ。普通なら幽霊のキャラの言葉は分からぬ。

しかし、マーちゃんは特殊な力を持つていた。

靈界通信というスキルを、しこまた上げていたおかげで、幽霊となつたミーチャンとも会話ができるのである。

「ふーだから、いわんこつけ無い」

「蘇生するから、ちよつと動かんといてや」

マー坊はここで始めて、体を起こして、ちょっとした使命感に突き動かされていた。

ミーチャンは友達だ。しかもこのゲームでぼけーっと街の広場で佇んでいた自分に、明るく声を掛けてくれた貴重な存在。

そんな彼女が死んだのだ。助けないわけには行かなかつた。

魔法のコマンドを押して、カーソルが出ると、ミーチャンにあわせる。

ミーチャンの体に白い光りが渦巻くエフェクトが表れると、彼女の魂は途端に現世へと戻され生き返る。

「有難うー！」

ミーチャンはやつ言つと、自分の死体から荷物を拾い上げ、落ちた装備を身につけていく。

マー坊は少しパソコンの前で、何か良い事をした気分に浸つていた。

彼女のナイト役は俺だといつ直角さえ垣間見える。

「あ、良く見たらミーチャンじゃん、おはー」

突然さつきの男キャラが、何とかモンスターを倒したのか、余裕ができるとミーチャンに氣安く声を掛けてきた。

「あらあ、ヌーチャンじゃない、」

「今帰つたの？」

ミーチャンはその男キャラの名前を見ていなかつた。

彼が声を掛けてきた時に、初めてそのキャラの名前に意識がいつ

た事で、知り合いだと分かつたようだ。

マーちゃんを蚊帳の外に置いて、楽しそうに話す一人。
どこか疎外感を感じるマー坊。

なんだ、こいつは？ 知り合いか？ やけに馴れ馴れしいじ
やないか

マー坊はなぜかパソコンの前で拳を握り締め、憤っていた。

「マーちゃん、この人、私の彼氏だよ」

ミーチャンが一言はなった言葉に、思わず絶句するマーちゃん。
しかしすぐに、気持ちを穏やかなものへと変える。
これはいわゆる、成りきりっていうゲームでよくある遊び方で、
彼はこの仮想空間の中だけのミーチャンの彼氏なんだと、言い聞か
せる。

「そっか、どこで知り合ったの？」

マー坊はゲーム内に存在するどこの街の名前を予想していた。

「新宿」

「.....」

マー坊はその言葉を聞いて、全てを受け入れるしかなかった。

彼はミーチャンの仮想空間の彼氏であるばかりか、現実社会の彼
氏だったのだ。

マー坊はパソコンに顔をうな垂れると、弱弱しい手つきでキーボ

一ドに文字を打つ。

「//一チヤン用事思い出したんだ、もひ帰るね」

「そつかーバイバイー」

マーちゃんは全力で洞窟を抜け出ると、野をジグザグと走り、森の中でログアウトして、ゲームをやめた。

グッバイ、MMO!

彼は心の中でうなづくと、そのMMOゲームに一度と手をつけなかつたそうな。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0770f/>

MMOゲームでの一コマ

2010年12月17日03時09分発行